

# 趣味を極めて 自由に生きる!

ただし、  
神々は愛し子に  
異世界改革を  
お望みです



紫南 Shinan

Illustration 星らすく



### メルナ

カルヴィア国の第一王妃。国中から慕われているが、第二王妃を殺した疑いがあり……

### フォスター王

カルヴィア国の王。フィルズを相談相手にして国内改革を断行している。



### リゼンフィア

フィルズの父でありカルヴィア国の宰相。妻子の信頼を取り戻すべく奮闘中。

### フィルズ

公爵家第二夫人の子で、モノ作りが大好きな少年。優しいながらもやや毒舌。セイスフィア商會を運営中。



### クラルス

フィルズの母。公爵家第二夫人。



### リーリル

フィルズの祖父。吟遊詩人。



### リュブラン

カルヴィア国第三王子。フラメラ妃の息子。



### ユゼリア

カルヴィア国第一王子。メルナ妃の息子。



### フラメラ

カルヴィア国の第三王妃。訳あって王宮を離れ、今は商會に身を寄せている。

### ラストリユート

王国騎士団長にしてリゼンフィアの親友。その美貌は男女問わず魅了する。

**主な登場人物** Main Characters

## ミッション① 血縁の真実を明かそう

カルヴィア国の王都にある、貴族の子息子女達が十五歳から十七歳まで三年間学ぶ国内唯一の学園。その中に、この国で随一と認められたセイスフィア商会が『フィアネル』と名を付けて出店した売店がある。

「聞きました？ このお店のフィアネルという名の意味っ。恥ずかしながら、わたくし、店の名前に興味があるなんて、考えもませんでしたわ」

「まあっ。可愛らしい響きだと思っておりましたけれど、意味があるんですの？」

「たまたま、語学の授業で先生がお話しになったらしいのです！ 古代語だそうですわっ」

「古代語……響きからすると、賢者の言葉ではないですわね？ 大陸共通語の方でしょうか」

「え？ 古代語に種類がありますの？」

少し前ならば、自分の無知を公言するようなことはなかった。プライドが邪魔をして意地を張り、うやむやにするだけだった令嬢達は、物事を知らないままであることの方が恥ずかしいことだと認識するようになった。

それは、セイスファイア商会で、いわゆる職場体験をしたからである。これにより令嬢達は、庶民でさえも持ち合わせている常識の多くを、自らは知らずに生きてきたということを理解したらしい。どれだけ働けばどれだけだけの収入が得られるものなのかを知ったことで、物の考え方も変わったようだ。何よりも人は支え合うものであるべきだと理解したことが、彼女達には大きいかもしれない。最近では、優位性を主張するのではなく、お互いに知らないことを教え合い、知っていこうという傾向が出てきたようだ。お陰で、貴族特有の陰湿な空気がかなり薄れている。

「古代語とされているのは、大陸共通語と賢者の二ホン語、それと神々が使っていたとされる神託語の三つだそうですね。ですが、学園で教えていただけるのは、大陸共通語だけ。他の二つの言語の確実な資料が残っていないこともあって、一般的には大陸共通語のみが古代語だと思われているのだそうですね」

「ですが、古代語の授業は三年生だけですわよね……一年でどれだけのものが学べるのかしら？」

「確か、ほんの入り口だけと聞きましたわ」

「そんな……学びの場ですのに、それで良いのでしょうか……」

こんな会話が、食堂ではなく売店のフードコートで行われている。食後、自分達でお茶のセットをカウンターで受け取り、互いに淹れ合って親交を深めるのがここ最近の流行スタイルだ。お茶を淹れるという経験が、今の令嬢達には新鮮で興味深いものらしい。

店長をしているのは、以前闇ギルドに奴隷として捕まっていた元令嬢のユリだ。彼女ははっきりともを言うし、表情に乏しいためにキツイ人だと誤解されがちだが、意外にも面倒見が良い。き

ちんと学びたいという姿勢で頭を下げてきた令嬢達に、お茶の淹れ方の指導をしてくれていた。

そんなユリは、カジュアルな濃い青のパンツスーツのような制服を着ている。そして令嬢達の座るテーブルへと、紙で包まれた甘い香りのするものをカートに載せて近付いていく。

「お話し中失礼。良かったら、来週から売り出すパンの試食をして欲しいのだけど」

「……是非！」

「ありがとう。感想はこの紙に書いて週末までに、あそこにある青いポストに入れてちょうだい」

「……お任せください！」

この売店では、時々こうして、試作品を提供して反応を見ることがある。今回はレモンクリームの入ったパンだ。一口大にしてある。時には、デザイン便箋の柄の好みの調査だったり、文房具のテストを頼んだりと色々とお願ひしていた。これがまた令嬢達だけでなく令息達にも新鮮で、一番に試せることが嬉しいらしく、好評だった。

「ユリお姉様は、古代語分かります？」

令嬢達の大半は、相手が貴族ではないからと下に見たりしなくなった。特にユリは制服姿が似合っていることもあり、令嬢達から『お姉様』と慕われている。人生相談もするらしい。

「多少は。他国でも、学園で教えてもらえる古代語は大陸共通語だけね。令嬢は、特に今後必要ないだろうって、覚える気がないのはいかな。けど、一年に数人は興味を持って教会で神託語も覚えるって聞いたわ」

この国よりは、ユリの生まれた国は令嬢達も学問に熱心だったようだ。

「確か……それで秘密の手紙を好きな相手と交わすつてのが流行つていたかな。令嬢達は、大陸共通語と神託語まである程度覚えるから、それでやり取りすると、自分の価値を伝えられるって」

「や、やつぱり、勉強ができる人……が選ばれますの？」

「頭空つぽ……年中脳内お花畑……知識量の少ない令嬢には、家を任せられないわよ。安心して王宮や領地に出かけることができないと。やつぱり不安って、仕事に影響が出るものだから」

「っ……家を……」

「任せられる人……」

この国の令嬢達は、ただ安穩と、全て夫となる人に任せて暮らしていけば良いと思っていた。しかし、庶民の暮らしも知って、夫の隣で添え物になるだけで良いのかと危機感を覚えているようだ。着飾るだけ、聞こえ良くさえするだけでは、人としての価値など示せない。それだけで愛されると、安泰だとはもう思えなかった。自分達に置き換えて考えることができるようになったため、客観的に想像できる。これは良い変化だろう。

「何も考えられないような、お母様のようにはなりたくないわ」

「そうね。お父様に愛想を尽かされるのも無理はないわ。逆の立場だったら嫌ですもの」

「ただ寄りかかるだけというのは、滑稽こっけいですわね」

彼女達は、父と母を客観的に見られるようになった。そうすると、いかに母が何もできない人であり、父からの愛などカケラもないかが分かってしまった。

「平民の夫婦を見て思いましたもの。理想とする夫婦とは、支え合って生きていくものだ！」

「ユリお姉様っ。わたくし達、まだ間に合うのでしょうか……」

「何人か、婚約を破棄するように動いている令嬢達もいて……家を出て働いて自分で生きていくという考え方もあるのではないかと……」

そんな自立心溢れる令嬢達は、そこでユリに頼む。

「ユリ様。セイスフィア商会でまた体験などできないでしょうか……」

「職業体験ということ？」

「はい……無理……ですか？」

「わたくしも！ その……リサーナ様が週末にお店に出ておられるのを見まして……」

「ああ……リサーナさんは、商会の準職員扱いですからね」

「っ、それは、やはり王女だから……でしょうか？」

「権力でどうにかしたと思われているのですか」

「はい……何人か、商会の方で働かせて欲しいと言っても断られたと聞きました……」

第一王女のリサーナが特別扱いされているのでは、と思ったようだ。令嬢達の中には、もつと働く体験をしてみたいと、商会に直接頼みに行った者がいたらしい。無駄に行動力のある人がいるようだ。

それを聞いて、ユリはため息混じりに断言する。

「会長は権力とか気にしませんから、特別扱いとかはありません」

「そうなのですか……？」

「ええ。良い意味でも悪い意味でも特別扱いはないですね。王子でも王女でも、王でも、平民でも仕事に関しては一人の人として扱うので」

「……そんなことつてありますの？」

「アレを見ても特別だと？」

ユリが指差した所には、黄色っぽいクマに頭を下げる第一王子のユゼリアがいた。

「お願いします！ 会長に相談があつて……時間をください！」

《ダメです。ユゼリアさんは、反省文と課題が終わるまで取り次ぎしませ〜ん。これはゼツタイです》

「ううっ……その課題が難し過ぎるんだよ……っ」

《何のために学園にいるですか？ 先生はいつぱいいますよ〜》

「ぐっ……」

《何人かの先生達に気まずいと思つているのも知つてますよ？ そこをきちんとすることも課題に

含まれているですよ》

「っ……わかつた……」

《は〜い。がんばるです。甘いものオススメセットでも買って、お部屋でがんばるですよ》

「……はい……三セットください」

《まいどあり〜です》

「ううっ……」

ユゼリアは魔導人形のクマにあしらわれ、肩を落としながら出て行った。

つい最近まで令嬢達は彼に媚びへつらつていた。しかし、全校集会でのやさかしを受けて、全ての生徒達が彼を見限つていた。

令嬢達としては、夢から覚めたようなものだ。お陰で現実を見られたと感謝もしているとか。ユゼリアからは媚びる者達が離れたが、別に孤独というわけではない。ちよつと鈍くさいだけの完璧ではない人と思つて手助けする者もいるようだ。そして、大半は見守る姿勢になつていた。

「……厳しいんですのね……」

「王子とか確かに関係なさそうですわ……」

「うちの商会は、努力する姿勢が大事なんです。商会に頼るのではなく、まずは教会の孤児院のお手伝いとかはどうですか？ 貴族令嬢らしい奉仕活動からできることを増やしてみたらいいかと」

「そうですわね……」

「あ、一度に何十人と押しかけてはダメよ？ そこも迷惑にならないように考えてね？」

「っ、有志で誰がどの日に行くかというのを決めた方がよい……ということですか？」

「そうよ。生徒会に相談してみたら？」

「……そうです！……」

「……この店の名の意味はなんでしたの？」

「……あ……」

すっかり話が変わってしまったことに気付き、ハツとした令嬢達だ。因みに意味は『知の社交場』だった。

ここ数日、セイスファイア商会の会長であり、この国の宰相である公爵の次男、フィルズは、時間ができれば工房にずっと籠っていた。工房は商会本店に併設された屋敷にある。

魔法を司る神であるアクラスがそこに姿を現す。前世に由来する地球の知識を持ち、そして神の愛し子でもあるフィルズのいる場所には、こうして度々神が顕現する。

「フィル。そちらの進捗はどうだ？」

「ん、あと少し。転用したクロス鉱石の加工が面倒だっただけで、あとは賢者の資料の通りだし」

「ほお……クロス鉱石か……魔導具にも転用できるとはな……記録媒介として使えると……」

「良かったら、加工が終わってるクロス鉱石、いくつか持っていくか？」

「っ、では五つほど」

「おう。大きさを別で持っていてもいいからな」

どれにしようかとアクラスは真剣に、素材置き場で屈み込んで、そこにあるクロス鉱石を手にとっては吟味しながら選んでいた。

《アクラス様。ケース使ってください》

「助かる」

この公爵領の工房に現在常駐するのは、王都の工房を任せている淡い銀色の毛のシラクという名のクマだ。本来のこの主は鉱山の方に派遣中だった。

そんなアクラスとシラクのやり取りには目を向けることなく、フィルズは作業に集中していた。それから三十分ほど経っただろうか。ようやくソレは出来上がった。

「よし！ 出来た！」

「ほお……随分と大きくないか？」

「大きくしたんだよ！ けど、なんとか、みかん箱サイズくらいには抑えたけどな！」

「みかん箱……ああ、賢者がA式とか言っていたやつだな」

つまるところ抱えられるギリギリのサイズだ。

「だが、普通は小型化を目指すだろうに」

持ち運び易さや収納、使う場所の広さを考えて、魔導具は小型化が推奨されている。小さいものほど手がかり、高価にもなるというのが常識だ。

「これの用途を考えると、立ち会う人が多くなったりするだろう？ なら、見易さが一番じゃん？」

「なるほど……審判の時に使うことが多くなるだろうから……」

「そうなんだよな。この賢者の資料でも『断罪の場で使うべし！』ってあるからな」

「書いてあるな」

アクラスとフィルズが覗き込む資料を、シラクもテーブルにぶら下がるようにして見ると、端に書かれたメモ書きを指さす。

《ここに小さく『托卵種に絶望と破滅を!!』と書いてあるのも気になります》

「うん。見なかったことにしなさい」

「見ても口にしてはダメだ」

賢者の資料には、度々こうしたメモ書きがある。日本語で書いてあるため、この世界の人が見てもまず分からないだろう。大抵この種のメモは恨み言であるため、読めたとしても気付かないふりを通すのがマナーだ。

シラクは良い子に言うことを聞き、テーブルから離れて床に着地すると、トコトコと目的の物を取りに行く。

《は〜い。収納ケース出来てますよ》

「おう。ありがとな」

「ほお。ファサラが絶賛していた裁縫箱さいほうばこのようだな」

「いいだろ？ この収納ケース。横に段々に開くのと、工具箱でもカッコいいよな。これにドッキングして……よし！」

収納ケースに固定すれば、持ち運びもしやすくなる。ケースの真ん中には取っ手があり、中に入れたソレも左右対称の作りなので、重心かたよの偏りもなさそうだ。

「完成！ さてと、テストするか」

「性能に問題はなさそうだがな」

「それが分かっても、テストつてのをやるのがいいんじゃないか」

「まあ……そうだな」

アクラスにかかれば、魔導具が想定する働きをするかどうかは一目で分かる。しかし、それでもフィルズはテストを欠かさない。

「本当に出来たって感じられて、いいだろ？」

「ああ。出来たこと、ファサラにも教えるか」

「呼んだか？」

アクラスの一言で、技巧の女神ファサラが現れる。本来ならば、神という存在は人とは違うため、彼らが放つ神気は人の体に良くない影響を与える。

しかし、この屋敷内では神気が抑えられるため、神々は唐突に現れる。屋敷に出入りする幹部達は、最近神々が現れても驚かなくなっていた。

ファサラは出来上がったソレを見て、一気にハイテンションになる。

「おっ。出来たのかっ！ 『托卵種判定機』！」

「待て待てっ！ 違う！ それは賢者が裏で言ってたやつ！ 正しくは『血縁判定機』だから！」

「そうだったか？ 分かりやすい方が覚えも良く、製品の名に相応ふさわしいのではないか？」

「分かるっ……分かるけど、それはあえて伏せよう」

「そうか？ まあ、いいが」

『托卵種』などと呼んでいたその賢者は、闇堕ちしていたのではないかとフィルズは思う。先程のメモからも察するに、かなり恨みは深かった。

「で？ あの第一王子、怪しいのか？」

「……ああ……だからテストで、確実に間違いないってのを見せつけねえとダメなんだよ……」  
「まだどこでというのは迷い中か」

「子どもは何も知らねえんだ。けど、これで判定された貴族は、特にその後の生き方がガリリと変わっちゃうからな。ユゼリアはただでさえ、やらかした後だし」

「フィルズが作ったこの魔導具は、ある真実を暴き出す。その結果次第では、第一王子のユゼリアを追い詰めかねない。」

「そのため、実用することには迷いがあつた。ユゼリアには軽率なところがあるが、それは失敗を学んでこなかった、学ばせてもらえなかったからだ。悪い子ではない。そんな子を破滅させるのは気が引けた。」

「とりあえず、ファシーに相談してからだ」

「国王には作っていることも教えていないんだったか？」

「魅了の魔導具を無効化させるやつを作ることになったじゃん？ それならこれも必要かなくて。完全に思い付きで作りましたし」

「……君はそういう子だったね」

なぜか呆れられた。何はともあれ、これにより、王族を蝕む元凶——王妃断罪への計画が一気に進むことになる。

血縁判定機のテストと調整を終えた翌日。フィルズは王都支店に移動していた。相棒の守護獣であるバイコーンのビズに乗り、その特殊技能で羽を生やし、空を飛んでやってきたのだが、今回はドラゴンのジュエルがついて来ていた。時刻は昼になる頃だ。

「ありがとな、ビズ」

《ヒヒイン》

「ん？ 近くの森を？ この辺は冒険者が多いし、人通りもそれなりにあるから、気を付けてな」

《フシュっ》

「おっ。分かっているな。そう。一番気を付けるのは貴族だ。だから、邪魔かもしれんが、馬具は着けとけよ」

《ヒヒイン》

「おう。いってら〜」

《ヒヒイン！》

《キュウウン♪》

「あ、ジュエルはダメ」

《クキュン!?》

当然のように、ビズの背にくっついて一緒に出かけようとしていたジュエルは剥がし取った。抱え直して、目を合わせると言い聞かせる。

「お前はグリフォンの亜種ってことになってる上に幼獣なんだぜ？ 珍しいって思われて速攻で捕

まるわ」

《クキュン!》

「いや、お前が強いことは知ってるけど」

パンチパンチと短い腕で撃退できることをアピールするジュエルだが、フィルズは首を横に振る。その間に、ビズは飛び立っていた。ビズもジュエルがついて来てはトラブルになると分かっているのだ。

「あのな? 公爵領とか、辺境の辺りは結構大らかな奴が多いんだよ。土地柄だろうな。田舎いなかってほど田舎じゃねえけど、助け合いつてのが当たり前になってる」

《クキュン?》

「そう。助け合わなければいけない土地だったつてもあるかもな。けど、王都は違う」

《クキュン……クウン?》

どう違うのかと首を傾げるジュエル。もう外に行こうという気はなくなったのか、フィルズの腕からよじ登るようにして左肩に前を向いてぶら下がった。

「傲慢な人が多いんだよ。他人の迷惑は考えない奴らが。そんなもつて『欲しい』と思ったものは即自分のもの!』つて我慢を知らない貴族がいる」

《クキュン!》

「そうそう。オモチャの取り合いをして、取られた方は泣いて、取つた方は悪いなつて罪悪感を感じながら一人で遊ぶつてのが子どもにあるだろう?」

《クキュン》

「このの貴族の大半は盗賊と一緒に、殺して奪つても渡さなかつた奴が悪いつて開き直れるくらい性格が悪い」

《クキュン!》

それは酷いとジュエルはただでさえ丸い目を更に丸くしていた。

「そんなもつて、周りに人がいてもお構いなさだ。見ていた人も見なかつたことにする」

《クキュン……》

ジュエルは愕然とした。

「つてことで、そんな所にお前がフラフラつと行つたらどうなるよ」

《クキュン! クウン……》

捕まっちゃう、籠に入れられちゃうと理解したようだ。

「そういうこと。取り敢えず、野生じゃない証にちよい装飾も増やすぞ。首飾りでいいか?」

《クキュン!》

宝石付きでと要望がすかさず飛んでくる。これにフィルズは笑いながら答える。

「あんま派手なの付けると、余計に欲しがられるぞ?」

《クキュン!》

しかし、これは譲れないらしい。ドラゴンだからか、宝石が大好きなジュエルだ。

「仕方ねえなあ。けど、それなりに目立つた装飾じゃねえと、相棒がいるつて分からもんなあ」

そう思案しながら屋敷に入ると、そこでアクラスが待ち構えていた。

「ん？ どうしたんだ？ アクラス」

「必要なのはこれだ。頑張れ」

「んん？」

アクラスはそう言って資料を手渡すと消えた。その資料には、V字型になっているしつかりとした首飾りが描かれている。

「ん〜つと……『ビリビリつと！ 変態撃退する輪くん』……するわくん……うん。賢者か」

《クキユウン？》

覗き込んだジュエルは、端に書かれていた言葉を指さして読む。

「ジュエル。小さいメモ書きは、飾りだと思うように。読んでではダメだ」

《クキユウンっ、クウンっ♪》

「楽しいこと書いてあると思ってもダメだ。そつと、見なかったふりしなさい」

《クキユ〜》

は〜いと良い返事をしてくれた。小さく書かれているのは、まるで恍惚とした表情が見えそうになる感想だった。要約すると、この首飾りを使うと気持ちがいいのだというのが分かる。

「変態避けなのに、変態が作ったとか、外間が悪いしな……」

見なかったことにするのが心の平穩のためだ。

「そんなことより、ささつと作つてやるよ。ファシーとの約束は夕方だしな。工房に宝石もあるか

ら、付けたいやつ選びな」

《クキユン！》

寶石という言葉に過剰に反応してみせるジュエル。我先にと飛び立ち、工房の方へ向かって行った。それを見て、フィルズは苦笑する。

「いつか寶石に釣られて捕まりそうだな……」

一刻も早く、変態はともかく『撃退する輪くん』を作る必要があるそうだ。

「エン達やビズのも作るか。気の重くなるような話をしなきゃならんしな。息抜きは必要だな〜」  
そうして作業に没頭していれば、夕方になり、ファスター王とリゼンフィアがやってきた。

夕食前に面倒なことは済ませようと、ファスター王も分かっていたのだろう。日が暮れだす随分前にやって来た。呼び出されたのが嬉しかったようだが、フィルズにそこは察せられなかった。

執事クマのガンナに案内され、執務室に意気揚々とやって来たこの国の王であるファスターと、実の父であり宰相のリゼンフィアに、フィルズは片手を上げて応える。

「お〜。早えじゃん。悪いいな。じいちゃん達の手伝いで忙しいだろうに」

闇ギルドと繋がつて悪事を働いた者達を公衆の面前で裁く、公開審判の準備が現在進んでいる。フィルズの祖父リーリルが旗振り役であり、ファスター王達も協力していた。

「なあに。フィルのお陰で、他の大臣達がよく働いてくれるようになったのでな！」

「今まで、いかに働いていなかったかが分かる……」

ファスター王は満足げに、リゼンフィアは苦々しげにそう告げた。反応が正反對過ぎて笑えるほどだ。

「ん？ 俺のお陰？」

どういうことかと問いかける間に、二人は応接ソファに向かい合わせに座っていた。

「大臣達の休日の楽しみが、ここのゲーム館に来て平民達に交じって遊ぶことらしい」

「あゝ、そう言われてみると……」

そのような報告はあつたなと思いつイルズ。

「大浴場にも来ているようだな。貴族の大半が通っているかもしれん……」

ゲーム館には、ビリヤードやダーツといったものから、スポーツを楽しむ卓球台やバスケットコート、テニスコートもある。カジノ系のスロット台、カードゲーム系もあるが、そちらはあまり大金をかけ過ぎないように制限をかけている。ギャンブルで破滅する人が出ないようにだ。

「奥方や、子ども達と買い物を楽しむ者もいると聞いているが」

「うちは、直接足を運ばないと買えないからな」

セイスフィア商会の商品は、屋敷に呼び寄せて買うことはできない。

「出張サービスや営業は、町や村ごとの依頼しか受けねえし」

一人客や一族のためだけには出張しない決まりを作つてあつた。よつて、出張サービスの依頼は、祭りの時に入ることが多い。

「近日だと、じいちゃん達がやる公開審判で出張サービスが決まつてるけどな」

「おつ。新作は出るか!？」

「甘い人形焼きと、ポテイモ揚げがな」

「おおつ！ 試食会はいつだ!？」

「明後日<sup>あつて</sup>だけど」

「ではまた来る！」

「……そのためだけに来る気かよ……いいけどな」

相当楽しみにしている様子なので、良いことだとしておく。実際、ファスター王の仕事の効率が上がっているらしい。この商会でしっかり息抜きができているのだろう。

「しかし、フィル。貴族達は客として問題を起こしてはいないか？」

「警備の方で実態を把握してるから、安全の確保も問題ねえ。さりげなくフォローできるように、現場の従業員の方にも常に連絡が入るようになってる」

地下にあるモニターで常に各所の映像を確認する隠密ウサギや、監視担当のクマがいる。

「それは……大変ではないか？」

「誰もが気持ち良く過ごせる場所つてのはさあ、努力し合わないと生まれないんだよ。だから、貴族の方にも色々注意事項というか、お願いはしてる。安全は保証するからつてさ」

「言うことを聞くのか？」

貴族達の普段の様子から、そうした配慮のできない者は目につくのだろう。リゼンフィアは懐疑的だ。いつだつて、会議の時に野次を飛ばしたり勝手に意見を言つたり、下位の者を威圧したりと

めちやくちやにする様子を見ているからだろう。あいつらが協力なんてするのかと信じられないらしい。

「聞かないのは追い出してるもんよ」

「……」

当然、力業だった。

「まあでも、一度そうやって問題を起こさずに平穩に過ごせる心地好きをすれば、何人かは迷惑行動が何かを理解できるようになるんだよ。きつかけつてやつ」

「あ……それで、最近会議がスムーズに……」

「自分達が余計な口出しをしななければいいって気付いたのがいたんだろうな」

「随分と落ちて着いて意見が言えるようになったとは思っていたが、これもフィルのお陰か！」

ファスター王が感激する。意味もなく罵り合つて時間を使う会議にうんざりしていたのは、リゼンファイアだけではなかったようだ。

そんな話をしているところに、リュブランと学園から駆けつけたセルジュがやって来た。

フィルズの異母兄であるセルジュと第三王子であるリュブランは、父親達がいる所に呼び出されたということを知らなかった。だから、少しばかり驚いたようだ。

「父上？」

リュブランは、普段父親であるファスター王を気にすることなく商会で働いているため、実はこ

うしてしっかりと顔を合わせるの、かなり久しぶりだった。少し戸惑いがちにゆるく首を傾げる。

「おお。リュブラン。最近は何の仕事をしているのだ？」

「あ、派遣会社のスカウトです」

「すかうと……ああっ、あの闇ギルドがあつた所でやると言っていたやつか！」

貧民街と呼ばれる辺りで燻<sup>くす</sup>っている人材を集めて指導し、確かな技術を持ったハウスキーパーやパーティーの時のヘルパー要員として派遣するという事業を始めていたのだ。既に指導は始まつており、第一弾の人員が派遣始動間近となっている。

そんな人材を町でスカウトするのが、現在のリュブランの仕事だった。

「だが、危なくはないか？ お前が、かなり腕が立つことは知っているが……冒険者としても、五級間近らしいな」

「っ、はい。ご存知だったのですね……」

まさか冒険者としての活動まで知られているとは思わなかったリュブランは、目を丸くする。それに気付き、ファスター王は少し申し訳なさそうな顔をした。

「ん？ ああ……私も反省したのだ。あまりにもお前達に無関心だったからな。今は、違うぞ！ 今回の仕事の前は、補助魔導具屋にいただろう」

「っ、あ、はい……そうです。でも、表の販売員ではなく技師としての仕事でしたが……」

メガネや補聴器を取り扱う店で、リュブランは着け心地や使い方の説明、細かな調整を任されて

いた。接客に顔を出すのは手が空いた時だけだったのだが、ファスター王はその姿を確認していたようだ。

「あの白衣姿はよく似合っていた」

「ありがとうございます……っ」

父親に認められたいと思い続けていたリュブランは、初めての褒め言葉に盛大に照れていた。戸惑いながらも、問いかけられたことを思い出して答える。

「そ、その、私にも魔導人形が護衛としてついたものもありますが、測量部隊の数人との六人チームで動いているので、あの辺りでも問題ありません」

「測量部隊とは、あの鳥を連れた者達だな。うむうむ。それで？ 魔導人形はどういったものか？」  
ちよっと目を輝かせるファスター王。それに少し身を引きつつリュブランは答える。

「父上のシャルテと同型のトラです……火の属性のレッカと名付けた子ですが……」

「おおっ！ 会ってみたいぞ！」

「……後でお時間があれば……今はシャルテやライデンと遊んでいると思いますが……」

「そうかつ！ よし！ 後で会うぞ！」

「はい……」

フィルズといる時に見ることはあっても、こうした様子の方スター王と向き合うのは初めてなため、リュブランは内心かなり動揺していた。

一方、もう一組の親子はというと、タジタジとなっているのは親の方だった。

「父上、お久しぶりです。仕事は大丈夫なですか」

「……心配してくれるのは有り難いが、ずっと仕事ばかりしているわけではないぞ……」

「そうなのですか？ それにしては、家に寄り付きませんでしたから気になっただけです」

「……気を付ける……」

「はい。母上とも、きちんと会話してください」

「わ、分かった……」

セルジュは責められる時は責めるようにしているらしい。未だに父を許していないということだ。リゼンフィアが家に寄り付かなかった間だけでなく、家にいる時でも、癩癩かんぱく持ちで傲慢な性格だった母であるミリアリアの相手を任せれ続けていたのだ。

それを少し根に持っている部分もあるが、関係が変わってからもミリアリアとどう付き合えば良いのか分からない様子の父を見て、情けなくも思っているようだ。嫌味っぽく言っではいるが、しつかりしろという激励でもあるらしい。

「おーい。そろそろいいか？」

「あ、ごめんフィル。それで何があったの？」

セルジュはガラリと雰囲気を変えてフィルズに駆け寄る。

「この魔導具を試して欲しくてさ」

「なあに？ これ……大きいね？ 小さなトランクケースくらいはあるんじゃない？」

フィルズがテーブルに置いたのは、血縁判定機だ。段々になった蓋を開けて、中を見せる。両

側に片手で掴めそうなるりとした濃い青い石がある。中央には大きめの三角錐さんかくすいの透明な水晶があった。

「これは、血縁関係を判定する魔導具だ。血縁のある二親等にしんとうない内まで確認できる」

「は？」

「二親等？」

大人組はそんなバカなと口をポカンと開け、子ども二人は首を傾げた。

「祖父母か親、兄弟、子、孫までの関係が相手にあるかが分かるんだよ」

「すごい！」

「……」

衝撃は大人と子どもでは違うようだ。その魔導具の重要性を理解できるかどうかの違いだろう。

大人二人はそこから目を離せなくなっていた。

ファスター王が恐る恐るという様子でそれに歩み寄り、信じられないものを見るように、少し身を屈めて机の上を見つめる。そして、しみじみと続けた。

「……また、とんでもないものを作ったな……」

「……作れるもの……なのか……」

リゼンフィアも同じように近付いて呟いた。

「過去に賢者が親子関係を証明できるものを作っていたんだが、一部の、これがあると都合が悪い貴族に記録ごと消されたらしい」

「それは……ありそうだな」

「やるだろうな……」

少しバツが悪そうにファスター王とリゼンフィアは納得する。

「作った賢者は命を狙われたりしてそうだね」

「なくしたいなら、作れる人が残っているのは不安だろうからね。フィル君も気を付けてね」

セルジュとリュブランは冷静に指摘する。貴族だからこそ、同じ貴族の考え方は分かるものだ。

「問題ねえよ。けど、当時の賢者も黙ってねえの。怒った賢者が怪しい占い師を装って、貴族家のパーティーとかに潜り込んで、ゲーム感覚で親子関係を暴いて遊んでいたみたいでさ」

「うわ。フィルもやりそう」

「フィル君もやりそうだね」

「分かる？ 俺も手を出されたらやる」

貴族や抑圧してくるような者へは、嫌がらせをするのが当然だとフィルズの中では決まっていた。

さすがにセルジュやリュブランは分かっている。

「けど、今回はまあ、平民向けではあるんだよ」

「え？ なんで？」

フィルズは、あえて本当の目的は明かさなかった。だが、今後の顧客は平民で間違いない。

セルジュが首を傾げる。ファスター王とリゼンフィアは、これが貴族達へ与える影響を考えるのに忙しそうだ。先ほどから百面相をしている。落ち着くのを待つつも、フィルズが説明を口に

しようとするれば、それより先にリュブランが何かを思い出すように口を開いた。

「そういえば……この前、町のお母さん達が話してたんだ。知り合いの夫婦が、生まれた子どもの髪色とか、瞳の色が自分達にない色だったから、母親が不貞を疑われて、せっかく許された結婚がダメになったって……」

「なにそれ。そんなことあるの？ だって、平民はほとんど恋愛結婚だよね？」

「そう。男の方は、女性の父親に殴られながら許してもらった結婚なのに、残念だ〜って」

「男の側からすれば、裏切られたって思うんだろうけど、ちよつと色が違うだけで疑うもの？」

「その子は、貴族みたいな見た目らしいよ。金の髪に青い瞳で」

「それは……貴族が無理やり手を出してる可能性はありそうだけど……でも、それなら女性の方は好きで関係を持つわけじゃないんじゃない？」

そんな子ども達の会話を聞いて、ファスター王とリゼンフィアは更に百面相をしている。それが面白いとフィルズは笑っていた。

「ははっ。まあ、そんなわけで、これを使えば分かるだろ？ 何代か前に貴族の血が混ざってれば、その色が子どもにも出ても仕方ねえんだけど、それを知らねえ奴は多いからさ」

隔世遺伝<sup>かくせい</sup>だつてある。遺伝の仕方など、この世界では貴族でも知らないことだ。教会では、遠い先祖からの贈り物だと説明するらしいが、気休め程度だ。確かな証拠や根拠を説明するわけではない。

「それに、そういう色が出ると、魔力も強い可能性が高い。そうすると、どこかの貴族が優秀な子どもを欲しがって、自分の子だとか言い掛かりを付けて連れていく場合もあるみたいなんだよ」

「そんなことするの?」

「おう。親の方も、それが原因で別れてたりすると、子どもが孤児院に入れられてる場合もあるし。養子が欲しい貴族にとっては、見た目が貴族らしい子の方が都合も良いしな」

そうして、見た目で人生を左右されてしまう子どもは多かった。リュブランは孤児院で少し暮らしていたため、そういうった事情も知っている。

「下位の貴族は、血筋よりも家を存続させることに重きを置いてるから特に、そういう子を連れて行くんだって聞いたかも……けど、親子っていうよりは、雇い主との関係に近いものになるから、教会としては貴族の養子にはあまりさせたくないのが本音だつて」

「だな。その色でさえなければ、愛情のある家庭で過ごせていたかもしれないって子どもは多いんだよ。だから、これが必要だと思っただ」

魔獣なんかがいる世界。命の危険がすぐそこにある世界だから、親が早くに亡くなって孤児院に入る子どもは多い。そこに、少し色が違うからといって、見た目を理由に子どもを手放す実の親がいるというのは、教会からしても困る問題だ。

「でだ。兄さん達に、最終テストじゃねえけどやってみて欲しくてさ」

「いいよ。あの母上が不貞なんてあり得ないし」

「私も」

疑いようがないと、セルジュとリュブランは確信を持っていた。しかし、親の方は違う。万が一

があるのではないかと、ファスター王トリゼンフィアは思っているようだ。表情が強張っていた。それは気付かなかったことにして、さっさと始めることにする。

「ほれ、そんじゃあ、宰相から。そっちの石に手を置いて、こっちに兄さん」

「は〜い」

「あ、ああ……」

そうして二人の様子は正反対だが、なんとか揃ってそれぞれの石に手を触れると、真ん中の水晶が青い光を宿した。

「これで親子の判定だ。次にファシーとリュブランも」

「うんっ」

「う、うむ……」

ほっとするリゼンフィアと動揺するファスター王が場所を代える。リュブランはセルジュと楽しそうに交代した。そして、青く光るのを確認する。

「親子な。そんじゃあ、あとは兄さんとファシー」

「そっか。違うとどうなるんだろう」

「ぞ、そうだな。む、赤か。これが、血縁関係がないということなのだな」

「そう。二親等内にないってことな」

リゼンフィアとリュブランもやってみて、セルジュとリュブランでもやっている。すっかりファスター王トリゼンフィアも落ち着いたようだ。

「因みに、祖父母とだと緑。兄弟だと……黄色だ」

フィルズがセルジュと触れると黄色に光った。リュブランがセルジュと交代し、赤く光るのを見ると、そんなことはあり得ないとはいえ、フィルズと兄弟関係にないと知り残念そうだった。

そうして、しばらく判定機で遊んでいると、ドアがノックされた。

返事をする、屋敷管理クマのガンナがちよこんと顔を覗かせた。

《お客様が到着しました》

「お、早かったな。入ってもらってくれ」

《はい》

そうして入ってきたのは、酒瓶を片手に持ったその辺のおっさんにしか見えない初老の男だった。

「よお。フィル。来てやったぜ」

「悪いなあ、スビじい」

「まあいい運動になったぜ。それに、ビズ嬢ちゃんと途中で会ってな。乗せてきてもらったのよ」

「あ、ビズが散歩するって言ったのはそのためか」

「なんだ？ やっぱビズ嬢ちゃん、迎えに来てくれてたのか」

「だろうな。この前、足怪我してたる。それで気になったんじゃないかね？」

「おおっ。気遣いもできるなあ、いい女だぜっ」

「な〜」

さりげなく弱っている者に寄り添ったり、困っている者がいれば絶妙な加減で手伝ってくれたり

する。ビズはとても気の利く魔馬だ。

「つてか、酒はもうやめたんじゃねえの？」

彼は酒瓶を手にしているか、側に置いているのが当たり前で、トレードマークのようなものだ。今回もそれを持っており、あまりにも当たり前過ぎてそのまま受け入れるところだったが、フィルズは、彼から酒はやめたど以前に聞いていた。

「コレか？ これはほれ、フィルが寄越したレルモのジュースだよ」

レルモはこの世界のレモンだ。ということは、中身はフィルズが教えたレモネードだ。以前披露した時にかなり気に入った様子だったので、水に適量溶かせば作れる粉末を渡していたことをフィルズは思い出す。しかし、入れ物が何とも奇抜だ。

「……なんで酒瓶に入れてんだ……」

「なんか、こう、持ってねえと落ち着かねえんだよ」

「ワキワキすんな……」

指を複雑に動かして、酒瓶を持っていない時の落ち着かなさをアピールする男に、フィルズは呆れた視線を送った。

「それにしても、本当に王と宰相まで普通にいるとはなあ。あ、風呂は入ってきたぞ。あの大浴場、いいな。近くに住みてえわ」

「住みやあいだろ。つてか、ウチに再就職しねえ？ 社員寮もあるぜ。食事もあるし」

「ぐっ……何やらせる気だ？」

ギロリと睨め付けるようにフィルズを見る男。それに特に反応せずにフィルズは答えた。

「測量・諜報部の取りまとめ」

「あん？ 今は誰がやってんだ？」

「隠密ウサギだけど？」

「人じゃねえんかよ！」

「スピジいの直弟子なんだから、いいじゃん。それに、あいつらやっぱ自分達より実力が上じゃねえと、頭つて認められねえし」

「ウサ達に負けてんのかっ」

「仕方なくね？」

「……それもそうか……」

因みに、兎によく似た魔物のラフィットが、古代語ではウサギと呼ばれることを知っている者はそれなりにいる。よって、ラフィットを模した魔導人形が隠密ウサギと呼ばれていることに、周りの者達は納得していた。

「まあ、その話はまた後で。とりあえず座つてくれ。兄さん達は……」

「いない方がいいの？」

「聞かない方がいいですか？」

本当は部屋から出すつもりだった。だが、セルジュもリュブランも何かを察しているのだろう。できればここにいたいといと、その目が訴えている。



者もいるが、仕事の時以外は普通に町で過ごしている者が多かった。諜報員などは、町に溶け込む術が重要だったりする。そして、人はずっと気を張って仕事モードでいられるものではない。

だから、たまには息抜きが必要だ。多くの秘密を見聞きする彼らだとて、喋りたい時はある。だが、それを一般人に話せばどう広がるか分からない。仕事にも支障が出る。そこで都合が良いのが裏の事情も知っているスピークだ。

「情報や秘密つてのは、誰かは知っているもんだ。だから、いつどこから漏れても不思議じゃねえ。口を閉ざそうとそいつを消しても、消されたことは残る」

どこにでも目はあるし、耳もある。

「見つけられねえ真実は、ただ知ってる奴を見つけられてねえだけだ。知ってても、そいつにとつては大したことでなくて、記憶の隅の隅に追いやられてるだけ。完全に何もかもを消すことなんて、まずできねえんだからな」

誰も知らないなんてことは、ほぼないのだとスピークは思っているのだ。

「俺は、そんなのを聞き出したり拾い集めるのが趣味なのさ。秘密にされたことを察知するのがちょっと他の奴らよりも敏感でな。だから、今回のも別に故意に暴こうとしたわけじゃねえつてのを一応、頭に入れてくれや」

「あ、ああ……」

これが言いたかった。別に知りたくて知ったわけではないのだと。

「結論から言うと、第一王子な。あれ、王妃の子じゃねえぞ」

「……っ、はあ!？」

「王妃の子ではない？ そ、それはどういう……っ」

ファスター王もリゼンフィアも、まさかの答えに動揺を隠せなかった。

「待ってくれっ。わ、私の子ではないと言われるかと思っただが？ 王妃の子でもない？ なら、誰の子だ!？」

「ああ。あんたの子でもなくてな。第一王妃には、腹違いの妹がいてな。そいつと、セクラ伯爵家の現当主の弟との子だ」

「なぜそんなことに……」

王家に縁のない伯爵家の、それも現当主の弟の子というのは、予想できるものではない。

「第一王子が生まれる少し前から体調を崩してただろ。子どもがダメだったようだな。まあ、自業自得だ。第二王妃に盛ろうとした毒物に触れたようだな。そのせいでつてことらしい」

「それは間違いない自業自得ですね」

セルジュは真顔で言い切る。それに、リュブランも、ゆっくりだが頷いた。

一方、ファスター王とリゼンフィアは衝撃から立ち直れずにいた。よって、スピークはセルジュとリュブランに話すようにして続ける。

「だよなっ。つても、第一王妃付きの侍女が凶行を止めようとして、わざと毒薬の瓶を割ったんだよ。そんな時にその侍女は解雇されて、その毒の影響もあつて数年後に亡くなったけどな」

「その証拠書類とかは？」

フィルズがスピークに尋ねると、彼はニヤリと笑って懐なつかから折り畳まれた紙を差し出した。  
「きちんとその侍女から預かってるよ」

「だと思っただぜ」

罪の告白ではないが、せめてもの意趣返しにと、そうしたものを情報屋などに売る者はいる。

「ファシー。持っとくか？」

「っ、い、いや……フィルが預かっておいてくれ。ここが一番安全だろう」

どこよりもセキュリティは万全だ。

そこで、しばらく考え込んでいたりゼンフィアが顔を上げる。

「その……もしや、その時に子がダメになったのを隠すために、妹の子を？」

「だな。ひと月ほど生まれにズレがあったが、上手く誤魔化ごまかしたんだろう」

「そう言われてみれば……状態が良くないからと中々会えずに、初めて会ったのが生まれて二ヶ月ほどだったが、二ヶ月にしては、かなりしつかりしていた気がする……」

ファスター王が記憶を探りながらそう呟く。最近孤児院で生まれて間もない子や生後二、三ヶ月の子を見ていたため、違和感に気付いたようだ。そろばん教室に通いながら、神官に交じって、孤児院の子とも逢を見ていたりした。王がオムツを替えた子も何人かいたほどだ。

「王妃の出産予定より、妹の子の方がひと月は生まれが早かったようだからな」

「だ、だが、それならばその妹はどうした？ あれに妹がいたというのは聞いていないのだが」

「小さい時に顔に酷い火傷やけどを負って、社交デビューもしてなかった。結婚後は行方知れずだ。相手

の伯爵家の弟の方も、足が悪くてほぼ外に出てねえ。今でも、本邸の離れで閉じ込められているらしいが……そこは、フィルが確認したんだろ？」

「ああ」

フィルズは執務機の引き出しから一冊の本を取り出して持ってくる。

「そもそも、スピじいにこの情報をもたらすことにしたきっかけがコレだ」

それはスクラップブックで、写真が貼られている。そのページには、痩せて弱った様子の男が窓の側に立って外を見ている姿があった。その姿を見て、一同は目を丸くした。

「こっ、これは……っ」

「似てる」

「うん……兄上にそっくり……」

「まさかこんな……」

ファスター王は、ユゼリアをそのまま年を取らせたような姿の男に息を呑み、セルジュとリュブランは冷静に頷く。そして、リゼンフィアはまさかという思いをそのまま口にしていた。

「鉱山の件で、伯爵家を調べるのに、隠密ウサギを送ったんだが、そこで撮ってきたのがコレだ。あまりにも似てるもんだから気になって、スピじいに確認したらこういうことだった」

フィルズはユゼリアや第一王妃のことを調べようと思っていたわけではない。たまたま、これにぶち当たったのだ。そして、まさかの真実に辿り着いてしまった。

「これを知ったから、途中になっていたこの血縁判定機を急いで完成させたってわけ」

「そういうことか……」  
ファスター王は、フィルズが平民夫婦のためと言いながらも、わざわざこれを見せた理由を正しく察したようだ。

## ミッシェロン② 本性を確認しよう

ファスター王にユゼリアの父母について気付かれたとは知らない第一王妃は、後宮の庭にある東屋<sup>や</sup>にいた。そこで穏やかに笑って、友人の夫人達とお茶を楽しんでいたのだ。

「お聞きになりましたか？ メルナ様。第三王妃は今や孤児達の母だそうですね。化粧もせず毎日、泥だらけになっているとか」

「まあ……お気の毒ねえ」

そうして、緩やかに首を傾げて頬に片手を添える第一王妃メルナを見て、彼女に仕える侍女達や夫人達は、ほうと息を漏らす。

清楚で可憐<sup>せいれん</sup>という言葉が似合う見た目。薄い金の長い髪は結って、頭の高い位置でまとまっている。そんな髪には、キラキラと光る宝石がちりばめられていた。瞳は薄い青だが、長いまつ毛が影を落としてあまりその色は印象に残らない。それも、儂<sup>はかばか</sup>げな美人だと貴族の中では有名だった。「お似合いですわよ。あのような横柄で傲慢な女、着飾っても下品にしか見えませんでしたもの。

孤児達も、汚しても良い者を見極められる良い目を持っているようですわ」

「本当に高貴で美しい方には、無礼を働かないものです」

「あら。それでは、フラメラさんが高貴でも美しくもないと言っているようなものかわ？ だめよ？ 彼女を傷付けてしまいわ。ただでさえ、ここを追い出されてしまったのに……」

悲しそうに、同情するように目を伏せるメルナ妃はまさに儂げで、美しく見えた。優しげな声も落ち着いていて心地好い。そして、仕草も計算されたものだった。

更に、目元を和ませ、両手を合わせる。良い案が浮かんだというように微笑んで見せた。

「ああ、そうだわ。お見舞いのお品でも贈りましょう。何がよろしいかしら？ 孤児院ですものね……食べ物とか？ 服とかかしら？」

これに少し首を傾げてみせれば、その可憐な様子に憧れる夫人達は顔を赤らめる。

「っ、泥だらけになるなら、替えの質素な服でもよろしいではありません？」

「罪人なのですよ。服は有り難がるはずですよっ」

「まあ。罪人だなんて……やはりそうなのかしら……」

口元に手を当て、不安そうに眉根を少し寄せる。そのように怯えたような様子は見ていて心配になる。それは怖がらせてしまったという罪悪感を相手に抱かせ、逆に本来の罪人と思われる側への同情心を減らした。

実際は、第三王妃フラメラは罪人ではない。確かに、嫌がらせや傲慢な態度を見せてはいたが、刑罰が必要なほどの実質的な被害などほぼなかった。迷惑行為が多く、ただフラメラ自身の好感度を落とすだけ。

息子であるリュブランとのすれ違いについても、本人達の間では謝罪も入り、和解して特に問題もない。その結果、フラメラは以前まで拘こわっていた王妃という地位に価値を見出せなくなり、もはや別人レベルで内面も見た目も変わっているのだが、メルナ達が知るはずもない。

「メルナ様っ。あれは自業自得ですよっ」

「王の妃としてありながら、それを笠に着るだけで、中身も見た目も腐っておりましたものっ」

「王の子を産んだというだけしか、アレは意味のない存在でしたわねっ」

「っ……」

その時、メルナの表情が一瞬強張ったのだが、誰もそれには気付かない。

「その王子も、大怪我をして死んだと聞きましたけれど？ オーガと戦ったのですって。間違いないあの女のせいでしょうっ」

リュブランは教会の保護を受けることで、情報の規制がかかっていた。それも裏への働きかけとして、フィルズが隠密ウサギを使っているのだ。王妃の周りにはまずその情報が入らないように徹底している。今のリュブランを見たところで、王宮で隠れるようにして暮らしていた彼と同一人物だとも思われないだろう。お陰で、そう苦労することなく隠せていた。

フィルズの母であるクラルスに協力してもらい、貴族の噂話の広がり方を加味した上で情報を流したのだ。怪我をしていたというのは本当だし、オーガと戦ったのも本当だ。その後姿が見えないということになったという話になったのは、情報操作が上手くいった証拠だろう。

「母親でありながら、子を死地に追いやるだなんて、それだけでも罪深いことですわ」

夫人や侍女達はメルナの貼り付けたような表情の変化に気付かなかった。  
「……そうですわね……」

メルナの小さな同意の声を聞き、夫人達は話を続ける。

「そういえば、先日、ユゼリア殿下のお話を聞きましたわっ。なんでも、不正をしていた教師と生徒を断罪されたとかっ。素晴らしいことですわねえ」

「生徒総会で、大勢の前でそれを暴かれたとか。なんと勇敢で正義感溢れる行いでしよう」

「まあ……そんな」

メルナは曖昧に答える。それを周りは謙遜と受け取った。メルナとしては、そんな話は聞いていないという動揺を隠しただけだ。

「きつと清廉で高潔なメルナ様に似たのでしょうね」

「王族として相応しい行動ですわ」

これに、メルナは花が咲くように笑い、礼を言う。

「ありがとうございます。あの子もようやく立場を自覚したようで嬉しいわ」

その後も、ユゼリアが学園で優秀な成績を残しているのはすごいことだとか、令嬢達が放っておかないだとか、褒め倒していた。それをメルナは微笑みを浮かべて聞いていた。

情報が古いか、真実ではないかもしれないことはどうでも良いのだ。彼女達は、そうして話題を提供し、同意し合えればそれで良いのだから。

「あら、日が陰ってきたわね。そろそろお開きにしましょうか」

「まあ。長くお邪魔してしまいましたわ」

「メルナ様とお話しできるのは、楽しくていいですね。時間を忘れてしまいます」

「わたくしも、皆さまとお話しできるのは、楽しいですわ。またいらしてくださいね」

「「はいっ。失礼いたしますっ」」

動揺を見せないように立ち上がったメルナは、そのままいつもの表情を見せながら自分の部屋へと向かった。何も話さずに部屋に到着すると、メルナは穏やかな口調で侍女達に告げる。

「少し疲れてしまったみたい。一人になりたいわ」

「承知いたしました。何かありましたらお呼びください。お夕食の時間になりましたら一度お声がけいたします」

「ええ。お願いね」

そうして部屋で一人になったメルナは、しばらくして笑いを噴き出すように表情を崩した。

「っ……ふふっ、ふふふっ。ようやくっ！ ようやくわたくしだけにつ」

第三王妃のことは、メルナの方で流した悪評もあり、王も貴族達も見向きもなくなっていた。

「あはっ。本当に面白いくらい、思った通りに噂になるんだから。ふふふっ」

メルナは若い頃から嫌いな者を排除するため、その人の不名誉な噂を流すのが大好きだった。そして、思い通りに家から追放されたり、謹慎させられて社交界から弾き出されたりするのを知った時の興奮が癖になっていた。

その胸元には、紅い宝石のついたネックレスが輝いている。



「はあ……楽しいっ。本当に愉快だわっ。人が堕ちていくのは本当にステキ……」

うっとり目を細める様子は、清楚で可憐などというイメージからはかけ離れたものだった。しかし、しばらくして表情をガラリと変える。それはとても残念そうなものだ。

茶会での曖昧で儂げに見える様子とは正反対の、はつきりとした表情を見せている。

「ああ、でもあの女、死んだわけではないのよね」

窓からは少し離れた場所にある小さなテーブルセットの椅子に着き、高く足を上げて組んで、気だるげにテーブルに頬杖をつく。その腕には、下品なほど宝石で飾られた腕輪が煌めく。

「それにやっぱり、実際に見てみたいわ。あの女が泥だらけになって、貧相な孤児達まぢに集られているなんて……っ、ふふっ、ふふふっ。なんて哀れなのかしらっ、是非とも見てみたいわっ」

整った長い指を口元に伸ばし、ニヤつく様を隠すように、確認するように触れた。

「ああ、でもダメね……病弱で儂さのある設定だもの。公爵領まで行くのは無理があるわ。面倒な王妃の仕事させられることになるのはイヤ。汚らしい孤児院への慰問いもんなんて、やりたくないわ」

王妃が担になうべき仕事というものがある。メルナは、王妃という立場には執着があるが、王妃の仕事はしたくない。元々、楽しんで煌びやかで貴きよばれる存在になりたかったのだ。孤児院への慰問などしたくないし、神官達は潔癖過ぎて好きになれない。

後ろ暗いことをしているからこそ、何もかもを見透かしてしまうような神官達と顔を合わせたくないのだが、その事実をメルナはずっと自分の中で偽っている。

「ん、そういえば、あの子どもが死んだと言っていたわね……それにしては、その報告がな

立ち読みサンプル  
はここまで

い……どうなっているのかしら……」

気になっているのは、第三王子のリュブランのこと。

「あの女も、わたくしの引き立て役として、ユゼリアが王位を継ぐまで置いておくつもりだったのに、運がないわねえ」

誰かが輝くためには、陰を担う者が傍にあるべきだ。第三王妃は引き立て役であり、メルナよりも劣っていることを広く喧伝けんでんすることで、影は濃くなり、光であるメルナがより強く輝くことができた。ほんの少し、王妃らしい姿と行動を見せれば、完璧な王妃だと誰もが納得したのだ。

楽で良かったのだが、その第三王妃をそのままにはしておけない理由があった。

「死に行くとはいえ、あの子どもが騎士団を作って出ていくと聞いて、魔寄せまよせまで融通させたのに、失敗したなんてこと……」

長い爪を噛みながら、メルナは忌々いまいましげにその存在を思い出して目を細める。

「あんな女から生まれたというのに、頭の回転は悪くないなんて誤算だったわね。それも、剣の腕まで……指南役達を代えて、本当に正解だったわ」

メルナが、第三王妃を排除することを優先したのは、リュブランの存在があったからだ。

たまたま書庫で出会ったリュブランは、歴史の書物を読んでいた。それも、まだ十歳になるかならないかの時にだ。それを見た時、意地悪くした質問に、的確な答えを返してきたことで戦慄せんりつしたリュブランとしては、優しいと評判の第一王妃に褒めてもらいたい一心だったのだが、それがメルナには警戒するきつかけとなっていた。

リュブランには、才能がある。凡人にはない輝きが見えてしまった。幸い、リュブランが非凡であることは、王にも知られなかった。絶対に知られてはいけなさと注意したところだ。

剣術についても、たった数回の稽古けいこでそれなりの素質を見せたと言う。だから、すぐにメルナは自分に忠実な者に指南役を変更させた。そして、不出来だと噂を流し、稽古も手を抜かせたのだ。

「アレを生かしておけば、ユゼリアの邪魔になる……はあ……あの子は、良くも悪くも愚鈍な妹にそっくりなんだから……」

ユゼリアは素直だ。その気質から、努力すればそれなりの結果を残せるだろう。だが、あくまでも努力すればというものが付く。

「あの子は凡人……それは仕方ないわ……わたくしの子ではないし……」

後半は小さく呟く。自分の子ならば凡人なはずはないのに、とメルナは最近よく思っていた。

「ユゼリアは、わたくしが正しく導けば良いだけのこと……けれど、あの子どもは……」

リュブランを表舞台に立たせれば、陰になるのは、ユゼリアの方だ。それが分かったからこそ、メルナは何よりも先にリュブランを消してしまいたかった。それに伴って、第三王妃が完全に失墜しつぱいすることになってしまった。実家や自身の伝手を使い、闇ギルドに依頼して排除にかかった。しかし、完了すれば必ず来るはずの報告が未だに來ないのはおかしい。

依頼人との不要な接触は避けるため、中間報告などは行われない。連絡がないということは、まだ完了していないということに他ならなかった。

「状況が分からないのは困るわね……最近裏の者も人員不足だと言って、お父様も人を寄せさな